# ドイツを中心とした ヨーロッパ印度學界の方向

佐々木現順

## 一

曾つて「古代學」(昭和三十二年十一月第六卷第二號大阪市立博物館)誌上で「ドイツ印度學界の現狀」といふ題下で一九五七年二月現在に於ける最新のレポートを發表しておいた。

又、同じ課題について大阪大學東方學會(昭和三十二年十二月五日)に於て更に增補したレポートを發表した。

そこでは私が親しく訪ねた全ドイツで印度學講座を持つ諸大學十八を盡く選び出して敍述した。しかしその場合、敍述せられた對象はドイツのみであり、又、紙數の限界內でドイツでも大學の現職教授の仕事のみに限られてゐた。

今、本稿ではドイツの大學を退いたアカデミカー並に研究所にありて研究に從來してゐるものについて述べ更に英國、フランス、イタリー、デンマーク等諸國に於てヨーロッパで注目されてゐるもののみを紹介したい。

其れ故に本稿は前記「古代學」と並讀することによつて少くとも現代ドイツの全貌をとらへうることを期待するところのものである。

## 二

さて、そもそもドイツがインド研究に於けるヨーロッパの先驅者として立ち現はれた歷史は極めて古い。三百年の過去に遡ることが出來るであらう。

その歷史を簡單に素描しよう。

サンスクリット研究を始めた最初のヨーロッパ人は、Heinrich Roth であつた。彼は一六五三年から一六六八年に至る間、殆んど印度全土にわたつて旅行したドイツババリヤのデイリンゲン出身の學者であつた。彼は六ケ

年間にわたつて現在のアグラで梵語を研究してゐる。彼の文法書 Exactissimun opus totius grammaticae Brahmanicae は遂に出版はされなかつたが、宣教師の梵語研究の爲に必須的なるものとして用ひられてゐた。

一六六七年には Athanafius Kircher が China Illustrata を出版した。その中でインド神話に關するノートを與へてゐるが、それと別にデヴナガリーによる五種のテーブルが附加されてゐる。此れはヨーロッパに於けるデヴナガリー・スクリップトで書かれた出版の最初のものとして見逃しえない歴史的價値を持つてゐる。

一八一二年には Franz Bopp がワヴリヤ政府並にミユンヘンアカデミー資金によつてフランスのパリーに出かけてフランス人 Chezy と共に梵語の研究を始めた。これがドイツの國際的エクスパンションの最初と考へられる。

十九世紀初頭より印度研究はドイツに引續いて起つた英佛と相競ふ樣になる。

シュレーゲルの後足であつた Lasson が Encyclopedia を出した。更に Indian Archaelogy 四卷が此れに續いた。こゝで注意すべきは現在ヨーロッパで有名な Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft の前身である Zeitschrift für die Kunde des Morgenlandes が Ewald の支援を得て始めて世に出たのも此の頃であつたといふことである。後者の ZKM の第一卷が表はれたのは一八三七年ゲッチンゲンであり、前者即ち現在の ZDMG は前者の第七卷目から一八五〇年に名前を變へて引きつがれて現在に至つた。

マックス・ミユーラーの文獻學上に於ける貢獻は今、こゝで改めて言ふまでもないが、十九世紀中頭に於ける Wilhelm von Humbolt のギーター研究も特筆すべきである。ドイツとインドとの文化的交流の先驅者は實に此のフンボルトであつたのである。

一八五五—一八七五年にわたつて世に出たペテルスブルグの Sanskrit-Dentsch Wörterbuch は七卷九千五百頁の大著であり、今なほ研究に欲くべからざるものとなつてゐる。ベートリンク並にロートのヴェーダ研究へのアプローチはかくしてその基礎を樹立しえたといつてよい。ロートに與へられてゐる言葉の意味は現代のヴェーダ研究に照しても多くの正當性を保持してゐる。協同者であつた Weber, Aufrecht, Stenzler, Schiefner は盡く共にドイツ人の專門學者であつたのである。

ドイツの印度研究の歴史が他の諸國と相違してゐる點

は其の研究が單に文獻研究に終つてゐないといふ點である。彼等の歴史はインド學が文獻研究といふ面と共に他方、印度の精神史研究が注目されてゐたことを我々に物語つてゐる。

ドイツ程、インドを精神から理解しようとして此れにとり組まんとした學界も珍らしい。一七九七年ゲーテがファウストのプロローグを書いた時、印度のシャクンタラの物語が、如何に強い影響を與へたかは既に有名である。シュレーゲルに對するラーマーヤナの印象、或はリッツケルトの詩ナラとかダマヤンティの影響(一八二八年に彼は書いた)、音樂家シューベルトやシューマンス、リュッケルトの Brahmanische Erzählungen ホルツマン(一八五二—一八七〇)の Indian Fables を讀むものは等しく印度精神のドイツ文藝への影響に驚異の眼をみひらくであらう。

印度歴史研究の上に於ては Albrecht Weber が一八五一—一八五二年大衆に始めて印度文學史を講じ一八五二年には印度に關する講演を出版し後のヴィンテルニッツの印度史研究の出る動機を與へた。ヴィンテルニッツがそれ以前に未知であつたプラクリット文學のジャングルに分け入りジャイナ研究の端緒を開いたことは衆知の如くである。

哲學思想の上にも印度思想は廣がつていつた。

ショーペンハウエルは、一八一五—一八一八年の間に Die Welt als Wille und Vorstellung を書いて東方よりの新しい光を投げ入れた。ショーペンハウエルの思想は現代に於てもなほドイツ人佛教思想家を動かしてゐる原動力となつてゐる。私の會つた印度學の若き學徒にして彼の思想への共鳴から印度學專攻に入つた人とも少くなかつた。

若き學徒が印度學に入るには絶えず深き思想への問題をひつさげてゐたといふ私の見出した事實は哲學を最も愛するゲルマン民族の今になほ生きるところの精神でないだらうか。

ニーチエはドイツセンの學友でもあつたといはれる。彼はドイツセンの印度古典飜譯を鞭撻した少き知友の中の一人であつた。ニーチエは一八八八年三月三十一日ペータ・ガーストにあたへた書簡の中で「エヂプトの法律を始めそれまで知られてゐた法律の多くは印度のマヌー法典の模倣であるやうに思はれる」と書いてゐる。

哲學思想の面ではショーペンハウエル—ニーチエ—グリム—ダルケの線が現代ドイツの佛教思想家の上に濃く

現はれて來てゐる。

以上の二つの歴史的傳統卽ち文獻學研究と精神史的研究といふ二の遺產は無關係ではありえない。兩者の基礎の上に出來あがつていつたのが兩者を統一するものとしてのドイツに於ける印度言語學研究 Philologie の樹立である。

ドイツ語の Philologie の本質は單なる言葉の研究ではない。哲學と分離した單なる日本に於ける言語學研究と意味を異にしてゐるやうである。ドイツに於ける Philologie とはドイツの持つ二種の歴史的傳統の總合統一である。卽ち文獻學的研究と共に精神史的研究とをバック・ボーンとした概念であると理解しなければなるまい。佛教をふくむ印度學一般の所屬分科は詳しく言へば哲學科の中の Philologie であり、そこでは Indische Philologie といはれてゐる。此の分科はドイツの一般的大學のカリュクラムである。ハンブルグ大學を一例としてそれについては他の處でも述べておいた（拙稿「ドイツの大學と研究精神」大谷時報十七號）。

とまれ Philologie は文獻學と哲學思想とをふくむ概念として理解せられる。インドの哲學思想を正當に理解せんためにはサンスクリットにふくまれてゐるロゴスを見出すべきであろう。

かくして起つたのが Philologie としての梵語學研究であつた。ペテルスブルグの梵獨大辭典を始めビューラ・ルユーダース・キールホルン・ヴッカーナーゲルと續く十九世紀末葉の諸研究が世に出るに至つた。ビューラは Khambay のジャイナ・ライブラリーから三萬に餘るマヌスクリップト並にタンジュール宮殿からの一萬二千のマヌスクリップトを發見したが、此れは現在ドイツに於けるジャイナ研究をして世界の最高の水準にまで上げしめた一つの大きなモニユメントとなつてゐる。一八九六年の palaeography 或はジャイナのビブリオグラフィーは彼の Sanskrit primer（一八八三年）と共に彼の名を不朽ならしめた。

フランツ・キールホルンはビューラの良き友として終止彼を激勵した。彼の文法はインドのパンディト（學匠）達をして「間違つた形態の與へられてゐない文法書としてヨーロッパで表はれた唯一のものである」と讃嘆せしめてゐる。彼の文法書に對するこの稱讃は彼の校訂になるパタンジャリーのマハーブハーシャ（Deccan College, Poona, 1880）が出づると共に愈々其の眞價を保證せられた。

Leopold von Schroeder のインド神話研究はヨーロッパ人をしてインド・ヨーロッパの神話を通じての文化交流に興味を湧かしめた。On Aryan Leligion 二巻(Leipzig 1914) に於て彼はインド・ヨーロッパ人の神々の信仰をギリシャに遡つて研究してゐる。これに刺激されてライプチッヒの哲學者 Rudalf Seidel が初めて佛教とキリスト教との比較研究を出した。そこでは新譯聖書の中に佛教經典よりの影響として聖書の三十頁にわたつての部分が引用せられてゐる。

サンキヤ・ヨーガのガルベの研究は衆知の如くである。彼の Die Sāmkhya Philosoplie は今に至るまでそれをしのぐものがないといはれてゐる。ヴガヴッドギータの譯註は今日までの出版物中、最も信頼すべきものの一つである。

言語學として巨大な足跡を歩いた Heinrich Lüders (一八六九—一九四四年) は斯界で令名を高からしめた。ゲッチンゲンのヴルドシュミッド教授の編集した遺著 Beobachtungen über die Sprache des buddhistischen Urkanons (1954 Akademie Verlag, Berlin) はおそらく彼の築いた最後の記念塔であらう。

パーリ佛教についてもサンスクリットと同じい諸業績があげられてゐることは衆知の如くであるからこゝでは述べない。たゞオルデンベルグ・ダールケ・グリム・パウルゼン・ヴレーザー・ザイデンシュトウッカー・ガイガー・フランケ等の諸教授の名のみで讀者は直ちにパーリ佛教についての一連の歴史を思ひ浮べるであらう。英國と共に始つたパーリ佛教はドイツに於て初めてその思想の構成が與へられたと言つても良からう。

その他、印度美術、考古學等各方面にわたり、ドイツはそれぞれヨーロッパの先驅者として又、偉れた學問の構築者として歴史的役割を果しつづけた。

過去に於ける印度とドイツとの文化的交流は上の呼く文獻學の上のみでなく精神史の上に於て著しいといふことは、他の國と比較してドイツの一つの大きな特色である。フランス人であるパリーのルヌー教授がヨーロッパに於けるインドの佛教についてはドイツのことばかりを書いてゐるが、そのことからしてもドイツの持つてゐる精神史上の高き役割がわかるであらう (Renou: Les Littérature de L'Inde. Paris 1951. p. 118ff)。

## 三

ドイツ學界の歴史について餘り語り過ぎた様である。

それは現代ドイツの印度學界がその今日の隆盛を專ら過去の傳統の上にのせてゐるといふこと並びに其の根底は過去に於ける文獻學と精神史的把握との二つによる印度の理解に模はつてゐるといふことを語りたかつたからに外ならない。

さて、以下、現代ドイツ印度學界の中、大學關係以外のアールバイトについて述べてみよう。

ハンブルグの Dr. K. Brün は若き學徒であるがインドのプーナで三ケ年間ジャイナの研究をなして歸つた。インドに於ける凡てのドイツ人がさうである樣に滯印中殆んどを旅行に費してゐた。遂ひに從來、未紹介だつたジャイナ寺院を發見。又、マヌスクリップトのみで知られてゐた Śilankas (272 n. Chr.) に關するプラクリットの文獻學的研究を出版した (Śilankar Cauppaṇṇamahāpurisacariya)。ゲッチンゲンの Dr. Rosen がヴルドシュミッドの下で律の研究をしてゐる。彼らも印度で二年の年月を研究に費した。ゲッチンゲンでは Dr. Heissig がチベットの Historische Texte、ライプチッヒにゐた Schubert 教授は現在ベルリン・フンボルト大學にゐてチベット學を教へてゐる。ドイツのチベット學は曾つて述べた拙稿(古代學第六卷第二號)の中に出でたヴェーラー・ホフマン等の諸教授の如く、チベットをチベット文化そのものの研究資料として研究してゐる。同じ樣に蒙古語並に蒙古文獻をとりあつかつてゐるところのゲッチンゲン大學の Dr. Heiss は衆知の如く蒙古學の權威である。梵藏漢對照のみでもなく佛教學との關係領域にも限られてゐない。フランクフルトの Unkrig 教授がラマ研究と共に現代チベット語並に文法を講義してゐるのもその傾向の一つである。因に私信によれば、ミュンヘンの佛教學・印度學者ホフマン教授は一九五八年九月の國際宗教史學會に來日の豫定であるといつて來てゐる。期待せられることである。此の傾向はノーベル博士の Divyāvadāna、ホフマンの Bon Religionen、更に又、Matthias Hermanns の近著 Die Nomaden von Tibet (Wien, 1949) ともなつて現はれてゐる。といつても古典文法の研究はそれ自體として研究せられてゐることは言ふに及ばない。

J. F. Kohl は若き印度學者であるが既にメソポタニヤと古代印度との文化關係について一書を出した。その他、彼は主として印度とその周邊文化圈との文化的影響を研究對象としてゐる。又、若き學徒 K. Cammann はミュンヘンに於てプラカーシャートマンの pañcapārika-

vivaraṇa 並にシャンカラの研究を進めてゐる嘱目されてゐる學徒である。J. Hertel はパンチャタントラの諸方面からの研究、又、最近、W. Hellinger が印度の精神史的把握を企て、Vom inneren Schicksal Indiens, 1953 を著した。しかし此の書は殘念ながらプロテスタントの宣教師による誤りの典型的東洋理解である。例へば一五一頁に satyāgraha の sat (眞實に存在するもの) を神的なるものと同一視してゐる如きは現代印度にある宗教的 Phänomenkomplex を理解せざることから出て來た誤解であらう。かうしたクリスチャンの intensive Absolutheitsbewusstsein から書かれた印度研究はヨーロッパですらもはや通用しなくなつたといふことの例としてあげておくのもむだでなからう。正しき印度の精神史については Mensching の Indische Geisteswelt 或は Hans Steche の Indien, Bharat und Pakistan 等をあげることが出來る。Glasenapp 教授はその哲學的觀點から幾多の著作を公にしたが、その主なる立場は所謂精神史的研究といふドイツの一つの流れを代表する世界的思想家であり同時に印度學者でもあることは言ふまでもない。此等は共にドイツ印度學の過去の歴史を支へてゐた精神史的把握の結實に外ならない。ベルリンの Ruben 教授編集になる Texte der Indischen Philosophie なるシリーズも同じ流れに屬する。現在そのシリーズ第二巻目フラウヴルナーの Die Philosophie der Buddhismus (Akademie-Verlog-Berlin-1956) が世に出でた。此れは小乘大乘を通ずる精神史研究であるが、そこには文獻學的研究を加味し、テキストを嚴密な仕方で飜譯註解しつつ客觀的展望を與へんとするものであつて、ドイツの傳統を生かした見事な編集である。印度についてではないが、かうした文獻を基礎として然も精神的把握と取り組んだ作品の出現は現代ドイツの新しい行き方として注目せられる。ハンブルグ大學のベンル教授とミュンヘンのハミッツ教授との協同作「日本の精神世界」などがドイツで非常な好評を博してゐるのもドイツ人の求める實證的にして思想的たる現代ドイツ人の歴史的性格と合致したからに外ならない。

エルランゲン大學の Karl Hoffmann については既に前掲の「古代學」誌上で述べたが、彼の古典文法の知識は特に Vedic Grammar Syntax に集中せられてゐる。言語を哲學的に解明しようとしたものに Peters Hartmann の Nominale Ausdruckformen im wissenschaftlichen Sanskrit (Heidelberg 1955) が現はれた。比較言語

學からのインド・ゲルマン語研究は既にシュルツエ・ブーダス等の諸學者の偉れた業績が見られたが、ハルトマンの該書はインド・ゲルマンの言語表現のうちに於て發展しながら然もそれと獨立にそこに敍述せらるべきもの自身から新しく形成せられて行つた言葉の意味に論理的發展の跡付けをしようとする野心に富んだ述作である。これは言語學界に於ける畫期的勞作とせられてゐるものである。

ドイツに於て特に目立つたことは我々の豫想に反してインド學が凡て文法學の上にその客觀性を求めんとしてゐることであつた。

同じ言語學の領域では Lüders の遺著 Beobacgtungen über die Pali-sprache des buddhistische Urkanons (1954) をあげねばならない。又、印度神話研究の權威 Joseph Masson はパーリ佛典に於ける神話的乃至原始宗教的要素についての研究に從事してゐる。

古代史方面では阿育王刻文の研究者 W. Schmacher は Die Edikte des Kaisers Asoka von Wachstum der inneren Werte (Konstanz 1948) を出版し、プラクリットから刻文の飜譯と研究を與へてゐる。

曾つてハッレ大學にゐた Prof. Thieme は現在、Kiellhorn の仕事を續けてゐる唯一の學者である。彼は曾つて一九三二—三四年インドのアラハバッドでリブヴェーダを研究し更にパンデイトと共にパーニニーの文法を研究して歸つた。ドイツ人の印度研究は一度は印度に於ける嚴しい試錬を通つてゐるといふことが最も特色ある傾向である。

チュービンゲン大學のハウエル教授はヨーガ並にインド・アーリャン・インド・ゲルマンの文化史的研究分野に於ける權威であり、一九四九年までチュービンゲン大學の教授であつた。今は退いてアタルヴヴェーダの獨譯に專心してゐる。

マールブルグ大學のノーベル博士のディビヤアヴダーナ並に金光明經に關する一連の勞作については同じく「古代學」で述べたが現在は義淨譯金光明經の獨譯に從事してゐる。彼がハックマンの業を引きついで佛教大辭典の編纂に從つてゐる。それが完成されれば斯界に於ける偉大なるドキュメントたりうることは疑ひない。今、第四分册まで出版された。一九五六年退官後、後繼者なくして一九五七年まで講義してゐたが、最近ノーベル博士よりの私信によれば、去る一九五七年十二月にフランクフルト大學の W. Rau 教授を迎へることに決したと

いふことである。なほ續けてハーベルは教壇に立つといふ。Rau 教授はベタンデャリーのマイーブトーシャー、カーリダーサのメーガドゥーダー並にインド・ゲルマンの言語學に於ける權威であり、梵巴を驅使した活躍は將來、大いに見るべきものがあらう。今世紀の大佛教學者ハーベルの後繼者として然も典雅なる古都マールブルク大學に於ける研究はその町を一層花やかな學都として登場せしめるであらう。

印度をふくむ東洋美術關係について一言しておこう。

ハイデルベルクの講師 Dr. Seckel は東アジヤの美術特に佛教美術の研究者として知られてゐる。ハンブルクの Meister 教授、フーイツの E. Consten、ゲッチンゲンの Prof. Stange、フランクフルトの Prof. Hentze、ケールンの Prof. Speiser 等は支那美術のみならず廣く印度・日本等の古美術研究者であり、それぞれの東洋博物館の館長でもある。

更に、現在ドイツに於て發行されてゐる學術雜誌の中その重なものだけでも次の二十種をかぞへる。

Abhandlungen der Preusslichen Akademie der Wissenschaften (APAW)

Alt und Neu-Indische Studien (ANIS)

Bonner Orientalische Studien (BOS)

Bezzenberger Beiträge (BB)

Indogermanische Forschungen (IF)

Hamburg School (HS)

Kuhu's Zeitschrift (KZ)

Mitteilungen der (Deutschen) Gesellschaft für Natur-und Völkerkunde Ostasiens (MOAG)

Mitteilungen der Institutes für Orientforschung (MIOF)

Mitteilungen des Seminars für Orientalische Sprache: Ostasiatische Studien (MSOS)

Nachrichten der Gesellschaft der Wissenschaften in Göttingen (NGWG)

Nachrichten der (Deutschen) Gesellschaft für Natur-und Völkerkunde Ostasiens (NOAG)

Orientalische Literaturzeitung (OLZ)

Orientalische Rundschau (OR)

Ostasiatische Zeitschrift (OZ)

Oriens Extremus (OZ)

Sitzungsberichte der Preusslischen Akademie der Wissenschaften (SPAW)

(Sitzungsberichte der Bayerischen Akademie der Wissenschaften. SBAW.)
Wiener Zeitschrift für die Kunde des Morgenlandes (WZKM)
Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft (ZDMG)
Zeitschrift für Indologie und Iranistik (ZII)

## 四

最後にドイツ・インド學界の動向について氣付いた點を述べておこう。

現代ドイツの印度學界を概觀するに其の著しい發展の跡を伺ひ知りうる。然もその發展の根抵となつてゐるものは歴史的傳統である。それに二つの主流がある。第一は文獻學的研究であり、第二は精神的研究である。

第一の歴史的傳統卽ち文獻學的研究は現在印度學講座を有する全ドイツ十八の大學に於ける言語思想の研究として開花した。第二の歴史的傳統卽ち精神的研究は印度哲學をば近代ヨーロッパ哲學と對決せしむる線にまで水準を高からしむるに貢獻した。大學を中心とする現在ドイツ思想界は印度哲學の動向を無視して自己の境位のみに止まることを不可能ならしむるに至つた。

この二つの歴史的傳統を止揚してその頂點に立つてゐるものが現代に於けるドイツ學界を支配してゐるところの動向卽ち印度學がその下に屬する Philologie なのである。

然して此の頂點に立つ Philologie の動向を具體的におしすすめてゐるものは言ふまでもなく學者の異常な才能であるが、それに劣らず具象化されてゐるのは現代印度との文化的連帶に外ならない。インドにゐたことのある者ならば如何に多くのドイツ人學徒が學の寶庫をめざしてインドに來りつつあるかを至る處に見たに違ひない。獨印間の特殊な文化的交流はストットガルトの Deutsch-Indische Studiengesellschaft (1951) の設立となつた。その前に既にミュンヘンには India Institute、ハンブルグには古き歴史をもつ Mittelost-Verein があつて活躍してゐる。一九五六年私がハンブルグ大學に在職中、ネール首相がハンブルグに來たことがある。その時ハンブルグ大學と印度政府との間に二百人の印度人に一切の經濟支援を與へてハンブルグに迎へるといふ契約が取りかはされ、ビルディングの一部を開放する事が約されたのであつた。その上、ドイツの經濟復興は多くの學

徒をしてインドへ留學せしめるに至つた。インドに於けるドイツ人留學生は、他の國々よりの留學生より二倍半の高額のスカーラシップを特に惠與せられてゐるといふ——東洋人には夢物語りかも知れない話を記しておいてもあながち迷惑になる人もゐまい。

大學卒業後、間もなくドイツの印度學の學徒は寶石のかくされたインドへといふことを彼等のロマンティシュなあこがれとでもしてゐるかの如くに見えた。私の會つた限り、印度學專門で印度にわたらなかつた學徒は遂ひに見出せなかつた。最も古い國で最も新しいものを見出さうとするドイツ人學徒の見る眼は高い。要するにドイツ人學徒は大人であつた。

世界のインド學研究の新しい方向は凡て此のドイツの動向に從ひつつあるかの如きである。先きに來日したスキスのレガメー教授も談話中のべてゐたがたゞ經濟的背景が此れを不可能にしてゐるといふのがドイツ以外のヨーロッパ諸國のなげきである。東洋人の考ふべきところであらう。東洋人が印度學研究のために印度へ印度へとわたりはじめた時、その時始めて日本の印度學界が世界的水準に高まつたと言へる時であらう。

## 五

英國で印度學講座は主としてロンドン・ケンブリッヂ、オックスフォードの三大學に設けられてゐる。ケンブリッヂではスミス・ベーリー等諸教授、オックスフォードでは、專らバロウ教授だけが中心となつてゐるのみである。

最も東洋學の盛んな大學はロンドン大學であつて昔日の大英帝國の面影を今にとゞめてゐる。こゝにある東洋アフリカ研究所はターナー卿を部長として支那・日本をのぞく印度とその周邊文化についてだけでも二十九名の教授講師の大編成である。ターナー教授はネパール語大辭典の著者としてつとに世界に知られてゐる。サンスクリットではブラフ、ダレイ、フリードマンチベットではスネルグローブ、パーリーではジャイニ等が活躍してゐる。次に梵語、チベット、パーリ語關係の最新（一九五七）の重なる講義とその分擔教授を記しておこう。

| | |
|---|---|
| J. Brough | Sanskrit |
| K. de B. Condrington | Indian Archaeology |
| A. A. Bake | Sanskrit |
| H. M. Lambert | Marathi |

| | |
|---|---|
| C. A. Rylands | Sanskrit |
| F. F. Allchin | Indian Archreology |
| J. Burton-Page | Hindi and Nepali |
| T. W. Clark | Bengali and Nepali |
| D. Friedman | Indian Philosophy |
| G. D. Gaur | Hindi |
| J. E. B. Gray | Sanskrit |
| P. S. Jaini | Pâli |
| J. R. Marr | Tamil |
| T. Mukherjee | Bengali |
| C. H. B. Reynolds | Sinhalese |
| Ri Russell | Urdu |
| D. L. Snellgrove | Tibetan |
| P. Hardy | History of Muslim India |
| J. B. Harrison | History of Modern India |
| N. J. Coulson | Islamic Law |
| K. C. Rosser | Indian Anthropology |
| M. L. Apte | Marathi |
| C. R. Bawden | Mongolian |

なほ巴利語を敎へてゐたステード女史は有名な巴英辭典の編纂名ウイリヤム・ステードの娘であつたが、夭折し、その後をジャイニが續けてゐる。又、支那學の Prof. Simon は支那學のみならず漢籍佛敎學、チベット學にも通じ現在、スタイン・マヌスクリップトの支那漢籍部の目錄作成に從事してゐる。既にゲラ刷も出來上つて校正してゐられた。Simon 敎授の漢藏對照研究は、現在ヨーロッパの學徒に重寶がられてゐる（Mitteilungen des Seminars für orientalischen Sprachen XXXII, Hft. I. 1930）Simon 敎授によると何しろ、スタイン・コレクションはスタインが原語に通じてゐたのでなく、唯、廣範圍に集聚したためマヌスクリップトの外、布地などの諸物品の斷片までおびたゞしい量をふくむので整理に非常な苦心を重ねてゐるといふことである。又、インディア・オフィスにまかされてゐる中のチベット文獻のコレク・ションはトーマスとトンプソン夫人の手によつて既にゲラ刷も出來上つてゐて、トンプソンの好意によつて筆者にもとどけられた。トーマスは既に Ancient Folk-Literature from North-Eastern Tibet (Berlin, Akademie-Verlag 1961) の著作がある。彼は本書でスタイン發見（一九〇七—一九〇八年）のトルファン資料の中、九世紀—十世紀までの寫本をとりあつかつてゐたが一九五六年五月物故した。

元來ロンドン大學の東洋學特にインド並にその周邊の研究は多く外國人によつてなされてゐる。特に東南アジヤ、インド等よりの留學生がこゝに集中して來てゐるため再びインドの大學を訪れた如き感がした。インドの多くの學者が從來こゝで學位をとつて歸つたのも當時はインド人の教育機關としての意味が濃厚であつたに違ひない。植民地の獨立と共にそれぞれの國に自國の文化が歸された時、英國の學界にとつても少なからざる影響のあることは明らかであらう。

長き歴史を誇り、パーリー佛教の草分けをしたパーリー協會はリス・デヴィズ亡き後ホーナー女史の異常な努力で出版を續けてゐる。六十もこえたとみえる I. B. Horner 女史の活躍は目ざましく現在中部ニカーヤ (MN) の英譯完成を目ざし女史の私信によれば既に最後の第三卷のプルーフが出來上つた。女史は現在(一九五七年十二月)セイロンに旅行し資料の集聚をしてゐる。同協會は絶えず外國の諸學者との連繫を密にして依然としてパーリー佛教の指導的役割を果してゐる。

同協會近著の Pāli Tipiṭakaṁ Concordance は一九五二年以來、現在までその十部を出し廣く佛教學界に於ける最も偉大な業績とされてゐる(拙稿「英國 Pāli Text Society の近業素描」大谷學報二三卷・四號參照)。又、最近(一九五七年)アングツタラニカーヤの註 (Manorathapūranī) の第五卷をハイデルベルクの Dr. Kopp が校訂して出してゐる。その仕方は巴利協會として理想的だと考へる方法であるとホーナ女史が言つてゐた。此れはワレーザーと共に出したものの最後の卷である。なほホーナー女史は本協會の事業として Mahāvastu, Divyādāna の英譯にも着手してゐるし、個人としては Buddhism through the Ages をコンツ博士らと共に出版してゐる。女史は單なる佛教學者である許りでなく熱心な佛教思想普及者でもある。プロテスタント王國の英國で最近佛教講演がラヂオ放送せられ出したといふことを私の訪英(一九五七・三月)の時、喜びを持つて語り、又、ヨーロッパ大陸よりも英國がかうした佛教普及が如何に困難な事情の下にあるかを語られた。

英國で最もアクティブな佛教學者として Dr. Conze がゐる。彼の研究領域は、般若系並びにアビサマヤに關するものである。現存既刊の般若梵文は盡く英譯し、八千頌般若の梵藏漢英の索引を出版した(タイプ)。"Maitreya's Abhisamayālaṅkāra" (East and West year V-N. 3-October 1954 Rome) でアビサマヤ研究の歴史を敍述し

又、Abhisamayālaṅkāra (Roma Is. M. E. O. 1954) を公にして英譯並びにシノプシスを與へてゐる。その他、Im Zeichen des Buddha, Sacred Sayings from the Perfection of Wisdom (The Buddhist Society, London 1955) Tibetan-Sanskrit Dictionary 9,000 Tibetan words, Literary History of the Prajñāpāramitā, Long kommentary to the Hṛdaya 等、テキスト並に註釋研究書凡て二十八册に上る著作を出してゐる。最近のものの多くはタイプ印刷である。現在二萬五千頌般若のオックスフォード・マヌスクリップトを研究し來年一九五八年イタリーから出版する準備をしてゐる。教授は書齋にはヴジュラパーニーを祭り自ら佛教徒と稱してクリスマスハンフレーズの佛教運動にも支援を與へてゐるがこゝでも亦、英國に於ける佛教普及の困難さを聞かされた。しかし現在、プロテスタントの主都ロンドンで佛教寺院建設の寄附が進められてゐるといふことであつた。

その他、大英博物館の Dr. Gardner, Miss Dr. Titley, インデイア、オフイス、ライブラリーの Dr. Thompson 等はそれぞれサイモン教授の支那・佛教學に於ける良き協力者となつてゐる。

## 六

次にフランス印度學の中心はパリーである。黑ずんではゐるがパリーには東洋的さびがある。フランスで學問は凡てパリーに集つてゐるが印度學講座もパリーのみであつて、パリー以外のリヨン大學のサンスクリット講座も曾つて Minard が擔當してゐたが今はゐない。

フランス大學では曾つてフーシュー・レヴイー等の活躍した跡と比較して今はさびれてゐる。しかし東洋學研究の傳統はゆるぎなく近年挽回しつつある。東洋學研究所としては五種が數へられる。一、Collége de France 二、École Pratique des Hautes Études 三、École Langues 四、Orientales Vivantes 五、Faculté de Lettres Ecole Francaise d'Extreme-Orient である。しかし中心はフランス大學であつて現在、ルヌーがサンスクリットを擔當してゐる。

ルヌーは古典インド・アーリヤン語の研究者として斯界の第一級の學者であることは衆知の如くであるが、海外特にインドに於ける名聲はドイツのアルスドルフと共に最も高い。インドで行はれてゐるマハーヴーラタ出版大事業についても大きな指導的役割を果してゐる。古典

梵語の確究として Grammaire Sanscrite, 1930 を早く出してゐる。これはクラシカル並にその以後のサンスクリットの歴史的研究であるが必ずしも言語學的著作とは言はれない。しかし曾つて出された La Grammaire de Pāṇini (paris 1948) を基としてそれを進めてヴェーディクに言語学的解明を与へたところの近著 Études Védiques et Pāṇinéennes Tome I. II. (1955-56, Paris) は從來、印度諸學者の間にさへ取扱はれなかつた領域であるため教授の學界に寄與した新分野である。その他、Dictionnaire Sanskrit-fransáise (897 pages, Paris, 1932) の編纂、或は最近の Durghatavṛtti (paris, 1956) の研究は教授の多方面にわたる研究の一つの成果である。

チベットの歴史並び支那學・佛教學研究の方面ではドミエヴーユ教授がゐる。筆者はその授業を見學する機會を得たが聽講者六名とトンファン發見の梵王詩經の研究中であつた。聽講者は一人のヨーロッパ人を除いて皆、支那人であつた。教授はルヌーと共に日本の學界を最も良く知つてゐる人の一人である。

フィリオザ教授は (Faculté des Lettres) 佛教學研究の指導者であつて Collége de France でも講義してゐるところのフランス唯一の佛教學者といつてよい。醫學より轉向して印度學研究に入つた彼は蒙古・チベットの呪術に特に興味をそゝいでゐる。彼はルヌー、ドミエヴィーン教授と共に名著 L'Lnde Classique 三卷を刊行した。本書はインド研究についての一種のエンサイクロペディヤといつても良く、かういふ總合的研究は最近に於けるフランスの特色といつてよい。パリーに於てではないが此れと類似の意圖でなされた極東學院の勞作は Bareu, Les Sects Bouddhiques du Petit Véhicule (Saigon 1955) のである。該書は小乘阿毘達磨に關する梵漢にわたる經典史とも言ふべき近來の偉業である。

École Pratique des Hautes Études には Lalou 夫人がゐる。彼女は主として國立圖書館のペリオ文書整理にあたり、そのチベット語を分擔してゐる。彼女のアールバイトは從來、重にクロノロジー・文獻目錄等に異常な仕事を殘してゐる。Les Textes Bouddhiques an Temps du roi khri-sron-ide-bcan (1956) の論文に見られるやうにチベットのクロノロジーについての研究に關心を持つてゐる。最近 Ārya-Mahābala-nāma-mabāyānasūtra (1954) を出版した。しかし女史に會つた時、チベットの密教に興味を持ちこの方面を自分の研究主題としてゐると言つてゐた。École Pratique で週一回二名の聽講者の

ために Eléments de Tibétain Classique として Bon-po de Tonen-Haung マヌスクリプト Vidyattamomahātantra を研究してゐる。自宅では專ら Vajrayana のチベットを研究してゐた。フランスのみと限らないが聽講者は一般に學生ばかりではない。ラルーの紹介でたまたま Ortoli といふ夫人にも會つたがやはり彼女の弟子の一人であつた。ラルー女史はヨーロッパでは "interesting lady" として知られてゐるがともかくも勞力家であり、そして又、熱心な佛教徒でもある。

イタリヤでは印度學一般は他の諸國に於ける程の隆盛を極めてゐない。たゞテュッチ教授の中東研究所が佛典チベットを中心にした出版物を出してゐるのみである。ローマ大學自體の性格からして大學での佛教研究は設けられてない。しかし中東研究所は Serie Orientale Roma, Rome Oriental Series を出してゐるがその中で學界待望の左記の書が既に出た。

Conze: Abhisamayālaṅkāra (1953); Tucci: Minor Buddhist Texts (1956); Frauwallner: The Earlist Vinaya and the Beginnings of Buddhist Literature (1956) etc.,

なほチベットの歴史、クロニクル、ヴィムクテイセーナのアビサマヤアーランカーラヴィヤーキヤの梵本等の續刊が期待される。更に英國のコンツは來年（一九五八年）二萬五千頌の般若を出すことになつてゐると私信で言つて來てゐる。テュッチ教授のライブラリーは個人のものとしては少くともイタリーで第一級であるといはれてゐるが特にチベット集聚の資料は最も多く、彼の研究所よりも完備してゐた。

イタリーに限らないが、テュッチは出版物の多くをゲラ刷で印度へ送り、印度人學者の校閲を求めてから出版するといふ確實な仕方で仕事をしてゐる。印度人を先師としてかうした國際的協力を求めてゐる點で學ぶべき點を持つ。又、筆者在印中、その門弟を印度へ勉學に出してゐた。若き學徒ダフイナ氏も印度のナグプールに勉學に來てゐた。ナグプールのラグフビラ博士或はゴーカレ教授等が有力なブレントラストであつた。

又、同研究所の East and West 誌は必ずしも學究的雜誌でないが若い人々によつて書かれてゐる興味ある雜誌である。

印度學一般についてはミラノのピサニ、パビヤのフイリピなどの諸學者がわづかにその研究領域を守つて研究してゐる。

研究所からの出版物の多くはイタリー以外にゐる外國人の手によつて出されてゐるが少いイタリー學者の中、ペテツヒなどはチベットの宗教史の專門家として有望であるといはれてゐる。テュッチ教授はカトリックの本場にゐるが名目ともに佛教徒であり、朝夕の佛前供養を忘れないさうである。一九五七年五月にはローマでブッダジャヤンテイの祭をやつてゐた。おびたゞしい藏書にうもれ、チベットのマンダラ、或はヴジュラパーニの下で如何にも歴史探檢家らしい抱負を語つてゐた。

ベルギー・オランダ・デンマーク等の諸國についても述べねばならないが紙面の都合で割愛したい。

たゞベルギーでは大乘經典研究家としてのラモート・ラーマーヤナ研究者の Dr. C. Bulcke がゐる。(The Genesis of the Vālīki Rāmāyana recencions J. O. I. vol. V. No. I. 1955) 特にオランダのホンダ (Gonda) 教授はインドネシア・印度周邊インド文化圏の宗教を專門としてゐる。彼は言語學的方法と民族學的方法論とを用ひて原始宗教の呪術的要素を研究し彼の研究は此の方面では獨壇上である。インドネシアとの文化交流にも盡力してゐる。デンマークでコペンハーゲンの國立博物館にゐる E. Haarh 博士はチベット文獻のクローロジーを綿密に整理し近く公刊する筈になつてゐる。彼は曾つてベルリンのブロック・ドウルックのチベットが北京版より古いものであることを論述した論文 (Berliner Khanjur Handschriften, ZDMG. Bd 104, 389-4055) を出してゐる。ベルリン版を一六八〇年とすればナルタン・北京の刊行本はその以後十八世紀初頭となるといふ考證については不日、更に著述を出すとのことである。

## 七

以上の素描で理解出來るやうにヨーロッパに於ける印度學佛教學の研究はドイツを筆頭に此れに英國・フランス・イタリーが續いてゐる。英國、フランスの花やかなりし過去の歴史は植民地政策から出て來る學問への特權がかなりあつた。ドイツは專ら政治性と無關係に印度をアカデミーの對象とした。このことは印度人學者自ら常に述べるところである。それがドイツの印度學への信頼と支援となつてゐることは爭へない事實である。此れに對して英國・フランスがアジヤから手を引いた今、その學問的方向に一大轉換期に達した。英國へのアジヤからの留學は減少してゆく傾向にある。フランスの空そしてパリーの屋根の下には國際的自由がある。これは將來の

フランス學界を隆盛ならしむるに大きな支柱となるであらう。この轉換期にあたつて自國を固めゆくならば現在ドイツのやうな學的水準に高まることは疑ひない。

ドイツの學問は單に抽象的な理論に終つてゐないことは出版物を見れば了解しよう。學問の國ドイツがその几帳面さと堅實さとによつて資料を學問にし上げてゆくといふことはむしろゲルマン民族の特質といつてよい。

諸國を見學してドイツ人學者の資料への異常な注意は驚く外ない。ドイツでは哲學的傾向と文獻學的傾向との二つが巧みにつかひ分けされてゐる。印度學もその例外ではない。

もう一つドイツ印度學界隆盛の理由は經濟力に支へられてゐるといふことである。近代に於ける學問の隆盛は經濟力に專ら依存してゐるといふことはヨーロッパに遊學したものなら誰しも強く感ずるところである。印度と直結した研究といふ結實もそこから生れてくる。ドイツ以外の國々の學者と會ふ度に常にこの點についてのなげきが彼等の胸裡にあると同時にドイツへの羨望の聲も聞かれた。ともかくヨーロッパ印度學界の現在はその進展めざましく、又、輝しい將來をもちつつ東洋諸國との協力を待つてゐるのである。（一九五七・一二・二〇）

大谷大學研究年報　第九集

目　次

一、ゲーテの藝術觀……大庭米治郎
一、スピノザに於ける永遠、持續及び時間……立花勝
一、觀經に於ける宗教的要求の意味と限界……二村龍華
一、武家に於ける宗教と倫理の分化
——近世儒佛分離論への一視點——
……柏原祐泉
一、佛典に用ひられたチベット語動詞の用法の研究……稲葉正就
附錄——活用動詞の活用表